もっと知りたい ふるさと ㊽

三島神社

古代体験パークがある羽尾三島平は須坂境で6～8メートルの段丘となっています。三島神社はこの段丘上部の字上三島にあって、神社は本殿と覆屋・拝殿が一連造りです。

延宝8年頃の「北村護家文書」に「三島三頭大明神」と記されています。これは、大山祇命・木花開耶姫尊・瓊杵尊瓊の「御神像」のことです。残念なことに2体は盗難に遭い、今は大山祇命の御神像となぜか仏像（大日如来）が安置されています。

祭神は、海神・山岳神・武神・農神として崇敬されましたが、養蚕が盛んになると養蚕・子授け・安産を祈願する対象となりました。

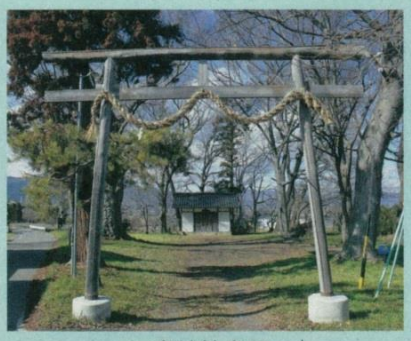
神社は、度重なる火災で古き物は失われ、わずかに残された棟板から社記が伺えます。

三島神社本殿

【八幡神社神宮寺（清水家）と放生会】

安永6年（1777）の「清水家文書」に江戸幕府から八幡神社神宮寺に100石の朱印地が安堵されたとあります。その地は、氏子十三カ村の内（羽尾・代・志川・郡）の村です。このことは「放生会」に関して該当村に特権を与えられたかについては不明です。

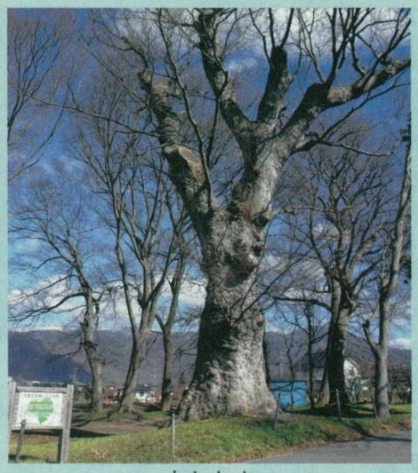
延宝8年（1680）年、14日の放生会を催した「清水家文書」に、七ケ郷十三カ村の氏子が勢揃いし、羽尾村の総代が火縄を花火師に渡す儀式が記載されています。席の序列は、〔先案内〕五町世話人・八幡寺高張提灯（神宮寺）・神主高張提灯（宮司代理）・四番目に羽尾村の「燈籠」（羽尾・仙石・須坂）です。以下十ケ村は高張提灯であって「羽尾村のみが燈籠」です。この日、三島神社境内は八幡宮寺に合わせ、羽尾上三島の氏子にて奉燈がされていました。この形は明治初頭まで続きました。


三島神社鳥居

明治政府の「神社合祀政策」により、明治41年から42年に、冠着神社と大字羽尾の村社雑社五社と須坂村の浮洲社（須坂神社）を合祀して冠着神社としました。そして郷嶺山へ6社の祠を拝し里宮としました。

合祀後、9月14日の放生会は廃止し、代って同日に、武水別神社の神主側で仲秋祭として継続することになりました。これが今の「トントン」です。

冠着神社では、9月23日を大字羽尾（四区・五区）の秋祭りに定め、郷嶺山冠着社里宮より三島神社にむけて両区の祭典取締りを先頭に同地区祭典係の行列が繰り出します。


大ケヤキ

【欅の年輪が歴史を語る】

三島神社境内に胴回り6・8メートル、高さ24メートルのケヤキの巨木（千曲市保存木57号・58号）が2本あって、昭和46年、腐枝伐採の折、研究用に切断しておいた材の年輪を計測したところ、樹齢507年で西暦1460年頃（室町時代）植樹されたと判明しました。時代背景から見て、周囲の名所・地形・由諸等と、「文政9年羽尾村絵図」の説明の中に「三島城古城跡三島組」の記述があり、三島神社の前身は一本松峠への玄関口を警備する出城であった可能性があります。

参考文献
戸倉史談会会誌
「とぐら」11号～13号

戸倉史談会　大橋　静雄